

No.88号

OB・Gニュース

2014年8月6日

発行責任者

社民党がんばれOB・G福島の会

eメール [huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp](mailto:huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp)

帰らざる17人程の兵ありて

静かなる村のひとつの嘆き

「戦争を伝える昭和万葉集から」

当時の平泉町25人出征17人戦死

## 閣議決定が一人歩きをはじめた・大きく「舵」を切った攻撃用武力の強化

集団的自衛権の行使を容認する閣議決定については、マスコミをはじめ、国民の新聞投稿、ブログ、ツイッターなどをもってその是非が討論された。

また全国の200に近い自治体においては、行使容認の憲法解釈に反対あるいは自粛を求める意見書が提出された。しかも、その意見書は、国政では与党である自・公の地方議員も含めた全会一致の採択も少なくない。

そして連日の反対、抗議行動も展開された。結果して、閣議決定はされたものの、法整備も含めた今後の国会審議が待っている。

これからが勝負であり、国会内外の長丁場の全国的討論を始めなければならぬ。そのような性格のものであることを確認したい。

7月6日の日曜討論の中で石破自民党幹事長は発言をしている。閣議決定に異論をはさむ意見があるようだが、そもそも閣議決定なるものは、政府が国会に提案するための議案を用意したということである。それが何故、問題

になるのかと言わんばかりの高飛車な発言が付け加えられた。

### 小野寺防衛相の「武力市場での品定め」

ところが何故か、その議案書が「一人歩きをはじめた」

安倍首相の外遊先での発言もしており、小野寺防衛相にいたっては、訪米先の「サンディエゴ海軍基地」での発言がある。それは具体的な防衛問題にまで踏み込んだものとなっている。

上陸作戦攻撃に用いる艦艇の導入をはじめ、最新鋭戦闘機F35の追加購入、あるいはオスプレイの購入を表明するなど。これは「自衛のための必要最小限度を超え、他国に脅威を与える強力な軍事力を保持しない」とする憲法第9条の理念を、明らかに逸脱するものといっても過言ではない。ちなみに上陸作戦用艦艇である。

甲板は全長250メートル。1000名以上の戦闘員の輸送を可能とする。さらに甲板には、ヘリ、オブスレイ、水陸両用車を乗せ、沖合から上陸攻撃を目的とするものであり、それは他国に攻め込む攻撃用艦艇である。

そしてF35戦闘機である。マツハ1.6はともかく、相手国のレーダーに探知されにくいステルス戦闘機であり、容易に敵地への突入が可能とする。

戦時、日本国土を襲った爆撃機B29の発進基地はサイパンである。そのサイパンと日本の距離は2400キロ。戦闘部隊、兵器・弾薬を輸送するオスプレイの航空距離3900キロである。優に某大陸の前線まで飛んでいく。

### すでに手を付けている「事態法」の改定

まさに、自衛隊の性格を、一変するものとしか言いようがない代物である。「自国の領土、領海、領空の防衛をはかるための自衛力」。これが歴代の内閣の方針であった。しかし、前記の装備力をどう説明するのであろうか。

自衛隊の、海外派兵を想定した実戦部隊の装備であると言っても過言ではない。

自民党の憲法草案には「国防軍」が明記されている。しかし、もはやそんなことは必要ない。実質的に「軍化」を果たすものであり、「叩かれる前に叩け」「やられる前に、やってしまえ」を想定する、「武力攻撃事態法」の改定を現実化したものに他ならない。

今後、安倍政権は法整備を実現させる中で、従来の防衛政策の変質を強めていくだろう。許せない。

ここを見抜く時期にあることを痛感する。統一地方選の中でもここを訴えるべきだ。

## 「歴史から何をまなぶ」

### 今を生きる者の責任を果たせ!!

天明の飢饉。それは江戸時代。1782年から6年間にわたり90万人以上犠牲者を出した最大の飢饉であった。

東北地方では生存者が3割という部落があったと古文書は記している。

最大の被害を出したのが八戸地区。

部落の長老の記録がある。

「天明3年。5月雨、雨、雨と綴っている。

6月に天候回復の祈祷を行う。7月に回復する

も「やませ」が続く」浅間山噴火。

8月下旬、草木の根を掘って食べる。親は子を捨てる。

10月 草の根もない。盗賊が増える。

1月 犬や猫、馬の肉を奪い合う。死んだ人間の肉を食べることあり。八戸の住民半分が餓死。これは人災であると記している。

「テレビ番組BS歴史館・館天明の飢饉より」

### ヒエは命をつなぐ・生活の知恵から

八戸の長老が記した最後に語っている「これは人災である」との言葉は重い。

「姥捨て」の物語がある。村田喜代子著の「蕨野行」の中に次のくだりがある。お山に行く前に舅女が嫁のヌイに語った言葉である。

「いつも申すことなり、鋸伏山の上に浮かぶ雲の形を畏れよ。春先に大きな傘雲が三日、四

日と続いてかかり、それが北の霧立山の方角からほころびていき、破れ傘になるなれば、寒い夏を呼ぶ知らせやち。破れ傘の現れる日は、風は湿つてなまぬるく、草木も動かず、鋸伏山の上を流れるのみ。空を敷切る二層あるように滞るなり。したら、かねてよりの大根の種まく支度せろよい。恐ろしい夏が来る。その夏は昼も夜のように昏く、小石のごとくなる雹が降りかかるやち。四、五年に一度のこの寒冷の夏は、免れずなり。大根は寒に強く、ヒエも凶作の命をつなぐ糧よい」

### 「供出の思想」が明治、昭和に引き継ぐ

当時、各藩は財政を潤わせるために「コメづくり」を奨励し、江戸をはじめとした一大消費地に売りさばく政策をとった。農民の糧のためではない、武士階級の富を得るためである。

農民の手に残るコメは僅かであった。

以前は常備食にもなり、それでいて冷夏にも強いひえやそばを耕作していた。しかし、藩の命令は米作であった。そして冷夏は米作農地を襲った。農家はひとたまりもなかった。

よく言われたことに、「白河以北は一山百文」というものがある。

全く価値のない土地だという引用である。

その土地から搾り取る時の各藩大名は、住民の生活ではなく「供出」であった。この供出の思想が明治政府の富国強兵策へと引き継ぐ。

それが兵隊の供出であり、軍馬の供出となり、

そして「女」の供出先という歴史を作ってしまった。そして「東北人の連隊は強い」と。

### 新しい時代への、はじまりの時代へ

さて、この時代にあつて、一人も餓死者を出さなかった地区がある。それが「白河以北」と言われた白河である。藩主は徳川吉宗の孫である松平定信。その後老中として手腕をふるう。

26歳であった。

若き藩主は次のように述べたと言われている。「凶作が珍しいことでも驚くことでもない。今までなかったことが幸いであった」と。

そして、城内の蔵のコメをすべてはきだし、住民の胃袋を満たしたという。

これが民を支配する政治から、民の立場に立った政治へ。そして権力の押し付けを排し、自らの知恵と力で、自分たちの生活を守ることへと移り変わる時代のはじまりであった。

東日本の災害は、まさに「やませ」が吹き荒れた平成の「天明の飢饉」であろう。

とするなら、当時の民が自らの生活を築き上げたように、2014年を生きる私たちが、何をどうするのかを、自らの「知恵と経験と工夫」で写真を描く必要があるのではないか。

番組の最後に、出席者の赤坂憲雄氏（民俗学者・福島県立博物館長）が述べていた。「私たちが生きている時代が、新しい社会が生まれてくるのはじまりの時代になるよう、今を生きたい」と。心に留めておきたい言葉である。

## 20代の若者が親の介護者に

### その犠牲はあまりにも大きい

6月17日に放映された「クローズアップ現代」で、「若者が介護者」になる実態を報じる企画があった。

団塊の世代の定年を迎え、やっと一息をついたと思ったところに親の介護が。そして妻が夫を夫が妻を。やがてはお嫁さんがお舅さんを介護するという実態は多く見てきた。

これは、ある意味での宿命と言いつつも、10代、20代で親の介護に時間を割き、将来の夢を断念しなければならぬということとは、宿命とかな運では片付けられない問題である。

6月17日に放映された「クローズアップ現代」は、この「若者が介護者」になる実態を報じる企画であった。

### 息子が介護退職・悩み続ける父親

番組の冒頭、施設に通所していると思われる若年認知症の母親が面会に尋ねてきた息子（26歳）を罵るシーンから始まる。目つきが変わった母親に困惑する息子の顔つきの場面は、認知症の要介護者と介護する家族の縮図を見る思いであった。

テレビが報じる父の介護をする25歳の娘さん。困惑する26歳の息子さんの姿に、並々ならぬ人生の重荷を痛感した。

25歳の娘さんは高校の時から介護を続けていた。そこに働いていた母が突然倒れる。娘さ

んは共同の介護者を失った。今はすべてが娘さんの手にかかっている。やむなく大学を中退。いずれは母親の面倒も見なければならぬだろう。仮に、両親の介護となればまさに「介護地獄」である。当然にして在宅看取りは困難となる。だが、その時に「介護制度」の適用が受けられるかどうか。その確証も得られない。

もう一人の男性。母親の介護をはじめたときは就職したばかりであった。休暇をとり介護を続けていたものの、次第に会社に居づらくなってきたという。上司が「10年・20年勤め、会社に貢献してきた人が、そうやって家庭の事情で休むならわかる部分もあるが、1年目なのに、休んでいるのはおかしいね」と言われ、僕はうなずくしかなかった。

父は働いている。どちらが辞めるかについて迷った。そして収入の多い父はそのまま働き、息子は退職を決断した。今もって、それがベターであったのかと悩む父の姿がそこにあった。

### この若者に明るい将来を与えてやりたい

「介護は先が見えない。いつまで続くかわからないから介護はきつい」。病気であれば、それが良いわけではないが看病の見通しがつく。それならば頑張って看取ってやろうとなる。それでもきつく、大変であろう。

20代の若者が、学校を中退しあるいは職場を中途退社してまでの介護を終えた時、二人は

何歳になっっているだろうか。将来を見出すことが出来るだろうか。

挫折感の中で「私の将来を父や母が奪った」と嘆いて当然の重さである。識者はいろいろと解説していたが、そこに触れることはなかった。

### 必要としたときに介護が受けられない

#### 2015年から始まる・介護難民

近代的な社会保障として「誰もが、どこでも、いつでも、必要な時に介護が受けられる」

この精神にたった介護保険法は、さして抵抗もなく国民の間に浸透した。しかし、それが今、根元から切り捨てられようとしている。

そして、この時期、政治の場は「集団的自衛権」の論議が展開されていた。この政治的時局の重要性を意識しつつも、静かにおし進められ、そして決定した「医療・介護一体法」である。

来年の5月には、要介護1・2の人は、入所希望待機者の列にも並ぶことができない。さらに「軽度介護」と称する要支援者は、介護保険制度の埒外におかれる。

今後、将来のある若者が、大きなハンディを負うのかと思うと、いても立ってもいられない想いかられる。

さまよう「介護難民」という言葉が生まれることが切ない。



### 「死者のいる歴史」を無駄にはしない

8月15日を風化させないためにも！

新聞の切り抜きを整理している私の目に入ったのが、2008年8月12日の記事（記者の目・毎日新聞）である。

◆「母の背中は木材が焼けたように真っ黒だった。それでも祖父は、母が覆いかぶさっていたのでほとんど焼けてはいなかった。残酷で大間違いの戦争でした。為政者がどんな美辞麗句を並べても戦争は人を殺すのです」（徳島大空襲で祖父と母を失った瀬戸内寂聴さん）

◆「戦争は、決して兵隊の殺し合いだけではないのです。私の両親や妹が一体何をしたというのですか。なぜ殺されなければならなかったのですか。日本が戦争をしていたからでしょう」（ガラスうさぎの作者・高木敏子さん。東京大空襲で父母と二人の妹を失う）

◆「一人ひとり血の通った人間だから、国より家族が大事だというのが本心だと思う。だから死にたくない。しかし、玉碎の名の下で死なねばならない。こうして死んでいった兵隊の気持ちや今の若者はわからないだろうね。だが戦争とはそういうものなのです」（海軍に召集された映画監督新藤兼人さん。クジ引きで激戦地に行くかどうかを決めた。100人中最後の6人の一人であった）

◆「ひどい食料不足になると、死ぬとわかっているのに捨てるに手を出さず。飢えて死

ぬというより、飢えに耐えられなくなって死ぬのです。そんな餓死者は、やせ細って木の葉みたいになっていた。人間の尊厳などありません」（俳人の金子兜太さん。南方の島で多くの部下を餓死させた。攻撃を受けて死ぬだけが戦争ではないと）

◆「おしっこをちびつて、ウンチも出るの。パンツが汚くなるの。でもはき替えられないの」（芥川作家の米谷ふみ子さん。若者に空襲体験を語るとき、こう言い添える）

### 戦争の証言は、時間とのたたかいになっている

今年も8月15日がやってきました。そしてあれから69年が過ぎました。

今年も、あの戦争の体験をされた多くの先輩が亡くなっていきました。「クジ引き」から生き残った新藤兼人さんも100歳の長寿を全うされました。戦争の証言は、時間と共に、薄くなり消えようとしています。

しかし、まだ語り継ぐ術は残っています。子や孫に、父母・祖父母の苦い、若かった時代の記憶をきちんと残したいものです。

### 強い軍事力を持つほど国民は危ない

次は津田塾大教授であり、自らが米海兵隊に所属していたダグラス・ラミスの言葉です。

「軍事力が最も強かった時代、そして暴力によって国民が殺された数が最も多かった時代は同じです。強い軍事力を持つほど国民が危ないのです。正戦論によって大勢の国民が殺されたのは、身近な歴史が証明しています」

### 怖い転倒・命取り

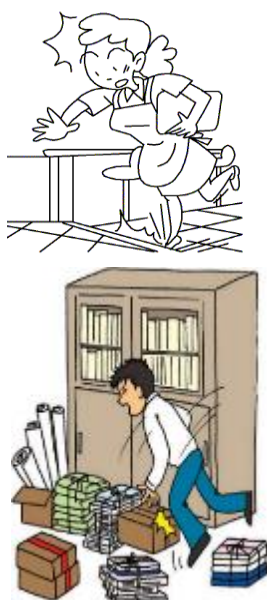
一般に50歳を超えると転びやすくなる人が増えていく。転倒は、脚力やバランス能力が衰えた体の異常を、知らせる警告かも知れない。よって、自分の生活と体の両面から、転びにくい環境をつくる心がけが必要となる。

### ぬ・か・づけ注意

「ぬ」は濡れたところは滑りやすい。「か」は階段と段差。足を踏み外す、躓く。「づけ」は片づけである。

転倒場所は意外と家の中が多い。床の上の物を片付けるだけでも予防になる。

転びにくい体をつくるには、毎日こまめに体を動かすことが大切。足の裏の感覚を磨くためにも、夏に向け靴下を脱ぎ素足で過ごす足の裏を刺激することも大事である。一寸した工夫と習慣が体を守る。



### 転倒予防川柳2013大賞

大賞 上がらない 年金こずかい つま先が  
佳作 転ばずに 笑い転げて 老いの坂  
頬を染め よろめくからと

手をつなぎ